

## 『近大必勝塾』現代文

### 近畿大学の現代文について

#### 出題形式

- ・現代文2問と古文1問で60分  
すべてマークシート形式



文章の難易度、長さを考えると

時間的余裕はないと思われる

#### 出題傾向

- ・硬質でタフな内容の文章
- ・設問は素直だが、ややこしい選択肢も
- ・様々な角度からの総合的な出題
- ・大きな流れを求めるタイプの出題

## 近畿大学現代文の対策

- ・過去問の徹底的な演習が必要



設問をすばやく処理する力をつける

選択肢のパターンに慣れておく

- ・文章全体の主旨をいかに早く掴むか

『冒頭に注目すること!』

- ・漢字は配点が高いので疎かにならない

○近畿大学入試問題にスポットを当てた  
対策が必要がある



一般的な学習だけでなく、

近畿大学入試の感覚を身に染み込ませる

〔一〕

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

西田幾多郎の『善の研究』は、日本人最初の独創的な哲学書としての評価が高く、「明治以後邦人のものでした最初の又唯一の哲学書」（高橋里美『全体の立場』）とまで讃えられる。本書が当時の青年たちにとれほどの感激をもって受け取られたかは、今日ではもはや想像も困難なほどである。同書に触れた倉田百三は、感激のあまり西田を訪問し、「この乾燥した沈滞した浅ましきまでに、ソクケに満ちたる我が哲学界に、例えば乾からびた山陰の瘠せ地から、蒼ばんだ白い釣鐘草の花が品高く匂い出ているのにも似て、我らに純粹なる喜びと心強さと、かすかな驚きさえも感じさせるのは西田幾多郎氏である」と、ほとんどラヴレターのような賛辞を捧げている。

実を言えば、僕は長い間『善の研究』に

ヘンケンを持っていて、ほとんどまじめに読んだことがなかった。後年の西田の哲

学に較べ、いかにも底が浅い若書きのように思われて、真剣に取り組む価値のないもののように思っていた。ところが、最近少し身を入れて読んでみると、<sup>①</sup>哲学のもつとも根本的な問題に正面から挑み、今日でも十分に考慮に値する説を提示している。

その根本的な問題とは何か。

本書は四編からなるが、第二編は「実在」と題され、「我々は何を為すべきか、何処に安心すべきかの問題を論ずる前に、先ず天地人生の真相は如何なる者であるか、真の実在とは如何なる者なるかを明にせねばならぬ」（岩波文庫、五九—六〇頁）と、その課題が述べられている。そして、「実在とはただ我々の意識現象即ち直接経験の事実あるのみである」（六六頁）と、直接経験（＝純粹経験）を実在と認めている。

実在、即ち真に存在するものは何かということとは、西欧の哲学がずっと求め続けてきた問題である。そこでまず、少し哲学史を振り返っておこう。

人は疑わしい存在に拠りどころを求められない。仮の存在や幻のような存在に頼ることはできない。真に実在するものは何なのか。それに対して、一つの、テンケイ的な答えを与えたのは、プラトン（前四二七—前三四七）であった。プラトンは、それは<sup>②</sup>永遠のイデアであるという。僕たちが日常目にするもの、手で触れるものは、すべて移ろいやすく、壊れてしまう不完全なものでしかない。イデアはそのような感覚的な事物を超え、理性によってのみ捉えられる。

例えば、三角形を考えてみよう。紙に三角形を描いてみる。しかし、それは本当の三角形ではない。紙には凹凸があるし、どんなに細いペンで描いても直線の

幅ができてしまう。だから、どれほど厳密に描こうとしても、そこに描かれた三角形は、理想的に考えられた三角形からずれている。そうとすれば、本当の三角形は、個別的な感覚を超越した理念としてしか考えられない。それが三角形のイデアである。このように、さまざまな感覚的なものに対応して、それぞれのイデアがある。感覚的で移ろいやすい世界に対して、イデアの世界は理性でのみ捉えられる永遠不変の理想世界であり、真の实在の世界である。プラトンによれば、そのイデア界の中でも最高のイデアは、善のイデアであるという。感覚を超えて、この善のイデアに到達することこそ、最高の幸福であり、哲学の目標ということになる。

イデアが非人格的な实在であったのに対して、中世のキリスト教では神こそが真に存在するものであり、被造物は神によって創造された不完全な存在と考えられた。中世が神中心の時代といわれる所以である。古代から中世へと哲学は大きく変化するが、僕たちが日常的に経験する世界を超えたところに真の实在があるという発想は、その主流となる思想の中枢をなしている。

ところが近代になって、このような発想は大きく転換する。その転換点を作ったのがデカルト（一五九六—一六五〇）である。デカルトはこれまでの常識をすべて疑い、絶対的に真実といえる实在に到達しようと試みた。それは、「ほんの少しでも疑いをかけうるものは全部、絶対的に誤りとして、ハイキすべきであり、その後で、わたしの信念のなかにまったく疑いえない何かが残るかどうかを見きわめねばならない」（『方法序説』、岩波文庫、四五頁）という、いわゆる「方法的懐疑」を徹底的に行なう。

言うまでもなく、感覚は間違いうる。推論も間違うかもしれない。目覚めていると思っても、もしかしたら自分の思い違いで、いま見たり考えたりしていることすべてが、じつは夢の中のできごとであるかもしれない。ここまですべてを疑ったところで、しかし、とデカルトは反転し踏みとどまる。「このようにすべてを偽と考えようとする間も、そう考えているこのわたしは必然的に何ものかでないければならない」（同、四六頁）。たとえ夢の中だろうが、間違ったことを考えていようが、それを考えているのは私であり、私が考えているという事実是谁にも否定できない。こうしてデカルトは、有名な「我思う、故に我あり」（コギト・エルゴ・スム）」という大原理に到達する。

中世の哲学は、まず神の作った世界の秩序があることを当然の前提として、それを人間が如何にして可能な限り正しく把握できるか、ということが問題であった。確かに人間は全知全能の神に及びもつかないが、理性によってこの世界の構造を把握することができるはずだ、ということこそは素朴に前提にしていた。

ところが、デカルトは、そのような客観的な真理に疑いを向ける。外なる世界の秩序を前提とせず、私が何を正しく認識できるか、ということ問い詰めるので

ある。それは、神の力に頼らずに、純粹に自らの意識の経験を反省して、そこに確実な原理を見出そうとする営みである。こうして、近代の哲学は人間中心に転換し、この私という個人の意識を原理として展開していくことになる。カントからヘーゲルに至る壮大なドイツ観念論の体系も、この個人意識の極端な「ダイ化と見ることができ

る。このことはまた、アからイへという転換をも生むことになった。中世の哲学は、絶対者である神、ならびに神によって創造された世界の秩序を解明することが目的であるから、外の世界に確固として存在するものについて、その存在のあり方を問う存在論が中心的な問題であった。ところが近代になると、人間中心の立場から、人間の視点からどのように世界が見られるかという認識の問題に、重心が移行することになった。その傾向は、カントから新カント派や現象学にまで及ぶことになる。

その際、大きな問題が生ずることになった。それは、独我論（ソリプシズム）と呼ばれるものである。もし「私が存在する」ということが確実だとしても、そのことは他の人の存在や、外界の存在を保証するものではない。確実なのは「私」ではない。もしかしたら、「私」以外のすべては夢や幻かもしれない。このような懷疑は、イギリス経験論の哲学者バークレーによって深められたが、その後も今日に至るまで繰り返し現われる哲学上の難問となっている。

じつは「私」は、最初から他者の間に埋め込まれているのであり、独我論は最初からおかしいのであるが、その前提を忘れて、「私」だけにこだわる限り、独我論は避けられず、袋小路に追い込まれる。そこで、⑥デカルトは一度は括弧に括つて外したはずの神を持ち込んで、この難問を回避しようとした。即ち、「自分よりも完全である何かを考えることをわたしはいいたいどこから学んだのか」（『方法序説』、四八頁）と問い、「それは、現実にならざるより完全な本性から学んだにちがいない」（同）というわけで、完全な存在としての神が認められることになる。「私」の確実性ではそれ以上の発展性はないが、全能の神が認められれば、どんなことであっても神の力ということでは証明可能になる。しかし、⑦それはもはや「私」の明証性とはまったく別の次元の問題に跳ぶことになってしまう。

問一 二重線部 a～e の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各項の中からそれぞれ選び、その番号をマークせよ。

- a
- 1 セゾクを超越する
  - 2 大国にジュウゾクする
  - 3 結婚式にシンゾクが集まる
  - 4 トウゾクに襲われる

- b
- 1 遣伝子が突然ヘンイを起こす
  - 2 日本のヘンキョウを訪ねる
  - 3 メールをヘンシンする
  - 4 頑固でヘンクツになる

- c
- 1 絵画をテンランする
  - 2 密教のキョウテンを読む
  - 3 テンニンを命じられる
  - 4 予想外のことギョウテンする

- d
- 1 相手の気持ちハイリヨする
  - 2 政治がフハイする
  - 3 体外にハイシュツする
  - 4 赤字路線をテツパイする

- e
- 1 条約をヒジュンする
  - 2 農村の経済がヒヘイする
  - 3 ヒヨクな土地に作物が育つ
  - 4 ケヤキのジュヒを剥ぐ

問二 傍線部①のように筆者が考える理由として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 西欧哲学では検討されてこなかった真の实在というものの存在について、西田が『善の研究』において果敢に挑んでいたから
- 2 『善の研究』の「实在」と題された第二編において、西田が西欧哲学より以前に直接経験こそが实在だと突き止めていたから
- 3 实在の追求こそが西欧哲学の根本的な問題であり、西田はそれに挑み第二編で直接経験が实在だという説を提示していたから
- 4 西田研究の根本的な問題はまず天地人生の真相を明確にすることであり、その答えは西欧哲学にあるという説を提示したから

問三 傍線部②はどういうことか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 理性によってのみ認識されうるものであり、常に変わることのない真の实在のこと
- 2 感覚を超えて善を追求することであり、誰もが幸福感を味わえる空想世界のこと
- 3 有機的なものではなく、無機質かつ抽象的で哲学の目標であり続ける感覚のこと
- 4 永遠不変の实在しない理想郷で、感覚的で移ろいやすい現世より高次元な空間のこと

問四 傍線部③はどのような三角形のことか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 厳密に測定され人為的に設計された三角形
- 2 理念に基づき寸分の狂いなく描かれた三角形
- 3 原型に最も近く観念的に推考された三角形
- 4 感性や経験に左右されない永遠不変の三角形

問五 傍線部④は何がどのように転換したのか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 理性で捉えられるイデアが哲学の目的であるとする古代・中世の発想から、それそのものが否定される近代哲学の発想へと転換した
- 2 非人格的な実在であるイデアに哲学の課題をみる発想から、神によって創造されたイデアがその主流だとする発想へと転換した
- 3 真の実在は日常的な経験の世界を超越したところにあるとする発想から、すべてのものを懐疑的に捉えようとする発想へと転換した
- 4 日常的な経験の中で真の実在を解き明かす古代哲学の発想から、非日常的な世界にこそ思想の中核があるとする発想へと転換した

問六 傍線部⑤はどのような真理のことか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 外界に創造されたキリスト教的な空想世界の秩序を仮説として成り立つ真理
- 2 神の存在を無条件に受け入れた上で理性による究明が可能とされた真理
- 3 全知全能の神にしゃにむに近づこうとしなければ到底得られない真理
- 4 理性を抑制しながら神への信仰を哲学として探求するために必要な真理

問七 空欄「ア」と「イ」に入る言葉の組み合わせとして、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- |   |   |       |   |       |
|---|---|-------|---|-------|
| 1 | ア | 存在論中心 | イ | 人間論中心 |
| 2 | ア | 認識論中心 | イ | 観念論中心 |
| 3 | ア | 人間論中心 | イ | 観念論中心 |
| 4 | ア | 存在論中心 | イ | 認識論中心 |



問八 傍線部⑥はどのようなことか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 デカルトは神も含めてこれまでの常識に対して徹底して懐疑的な立場をとってきたが、独我論の難問には神を以ってそれに対応せざるをえなかったということ
- 2 デカルトは神の存在を超越する方法で自分の哲学者としての立場を堅持してきたが、八方ふさがりになって仕方なくそれをあきらめて神を認めたということ
- 3 デカルトにとって「私」以外の哲学的な本性は存在しないのだが、それは他人や外界の中に埋め込まれており発掘するには神への信仰が必要だったということ
- 4 デカルトの中ではもともと自分の本性と神の本性のみが確実なものとして存在していたが、ここでは神の全能性をより信じるべきだと再認識したということ

問九 傍線部⑦の説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 独我論は哲学的な観点からいえば説明不可能なものだが、宗教的に考えると大きな論争へと発展してしまう
- 2 「私」の存在を全知全能の神によって証明してしまえば、哲学の問題を探求するための基盤が失われてしまう
- 3 デカルトは当初「私」の存在に原理の確実性を見出したが、神の存在を認めたことで問題が抽象化してしまう
- 4 「私」以外の存在がすべて夢や幻であるとするならば、それは異次元の話で現実離れた空想になってしまう

問十 本文の内容と合致するものとして、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 古代から西洋哲学の基礎を築いたプラトンはイデアを中心に議論を進めたが、近代に移ってデカルトが極めて斬新な方法論でそれに挑み神の存在に屈した
- 2 西欧哲学の歴史はプラトンのイデアに始まり全知全能の神の存在からデカルトへとその理論が構築されてきたが、近代の独我論によって衰退の一途を辿った
- 3 西欧の哲学は真の实在とは何かを求めてきたが、歴史を振り返ればその理論の前提はイデアから神を経て、疑いながら認識しようとする「私」へと移り変わった
- 4 西田の著書である『善の研究』は日本を代表する哲学書であり、プラトンの善のイデアと通じるものがあるが正に「私」を中心とする東洋哲学だといえる

〔三〕

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

洋画研究所では、デッサンばかりやらされた。絵は好きなのだから、それに不満があったわけではない。しかし、エライ絵描きになるには、上野の美術学校を出ないといけないと思いきりでいたので、とにかく、その入学資格になる学歴がほしく、またもや適当な学校を物色しはじめた。

僕は、子供の頃から、学校というものはねむたい所だと思ってきたが、新聞を見てみると、日本大学付属大阪中学の夜間部が生徒募集をしている。夜間中学なら、僕の目がパッチリさめている時に授業になるのだから好都合である。その上、途中でやめた工業学校の続きということと二年に編入できるようだ。

そうすると、兵役直前という時に美術学校へすべりこめる(当時、美術学校は、そんなにむつかしくなかった)。

これはいいアイデアだ。試験も簡単で、すんなりと入れた。

入ってみると、たつぷりと朝寝坊してから行けばいいので、とても楽だ。僕は、うれしくてしかたなかった。

だが、ここにも、軍国主義の波が押し寄せてきていた。

校長先生は、やたらと、「非常時」を口にした。僕は、しばしば学帽をかぶるのを忘れて学校に行った。わざとやったわけではないが、結果的に、帽子が頭の上になかった。こんなことが重なる、生徒が集まっている中で、僕は、高い壇上に立たされ、校長自ら訓示を垂れた。

「この非常時に、実にだらけた生徒がいる。この生徒の頭を見たまえ。制帽をかぶらず学校に来て、しかも、反省の色も見えん」

たかが帽子のことで、稀代のぐうたら生徒ということにされてしまった。僕は、夜間中学に入れたのですっかり<sup>①</sup>安心していたのだが、日本は、ちょうど日本軍が仏印(フランス領インドシナ)に進駐した頃だったから、全国民が緊張と胸さわぎを感じている時だったのである。

数学の答案用紙に、答えが書けない(即ち、わからない)ので、「アーメン」と書いて提出した。アーメンというのは「かくの如し」という意味だから、文字通り、アーメンなのだが、校長室に呼ばれて、「ぶざけすぎだ」と叱られた。僕は、ただ白紙で出すのも愛嬌がないと思って、ユーモアを示したつもりだったが、世の中は、どんどんギスギスした感じが強くなってきた。

昭和十六年十二月八日の朝。

ラジオがバカにやかましく軍艦マーチを流す。ねむい目をこすりながら母に聞くと、戦争が始まったという。

「あっ」

と思ったが、僕が開戦を決めるわけではないから、どうにもなるものではない。

この時から、僕の灰色の人生が始まることになる。しかし、しばらくは、<sup>②</sup>そういうことはわからなかった。

町の中は、<sup>③</sup>祭りのようなコーン状態になり、ラジオは、やたら勇ましい放送ばかりしていた。

学校では、校長先生が先頭に立って、日の丸ハチマキをしめて建国体操とか称するものを始める。祭日には、天皇陛下に尽くした忠臣の話ばかり。教練の元少尉は、やたらはりきりだし、僕が夜間中学じゃ教練はないだろうと安心していただけ、校庭に電灯をつけて軍事教練をやりだす。元騎兵大尉だった漢文の先生は、授業そっこのけで、武勇伝を話します。

自由な発言というほどのものでもないが、僕が、「先生、戦争も満州まででエエんじゃないですか」

などと言ったら、教室から引きずり出された。町内会あたりでも、何かというと、「非国民」ということにされた。

僕は、子供の時、軍人にあこがれていた。それは、アからだったがアというのは、他人がやっているのを鑑賞している時の気分で、自分が参加すると、アというよりイものなのだ。自分が、いやでも参加させられる年齢が近づき、しかも、もはや絵描きになるつもりになってしまうと、軍人や戦争や、ましてや戦死なんかは、ウばかりだった。

ところが、新聞や雑誌では、文化人や有名人といった連中が、若者は国のために戦争で死ぬのが当たり前で、天皇陛下のために死ぬのは名誉なことだ、というようなことを言っていて、自分に都合のいい万葉集の歌なんかを引用して力んでいた。駅頭の人ごみでは、千人針といって、千人の女の人の手によって縫われた腹巻を作り、それでタマヨケになるといって、<sup>④</sup>不思議な運動をやっていた。そのすぐ後では、歓呼の聲に送られて汽車に乗る出征兵士の姿が見られた。

そういうしているうちに、僕の好きな菓子屋が菓子屋から消え、砂糖が配給制になりだした。

僕は、それまで、胃腸も丈夫なズイボで、寝ることも好きで、動きまわったり絵を描いたりして楽しく生きてきた。だから、ここへ来て、死がせまっていることを考えるのは、非常につらいことだった。

哲学なんていうものも無縁に生きてきたわけだが、どうしても、<sup>⑤</sup>書物らしい書物も読むようなりゆきになる。哲学史の概説書のようなものを読んで、どんな考えを持っている人がいるかをざっと調べ、面白そうな人の本を買うことにした。

ニーチェだとかショーペンハウエルだとかがよさそうなので読んでみたが、も

つともだと共感することもあるのだけれど、読後少したつと、どうもしっくりしてこない気がした。聖書も読んでみたが、どうも僕には向いていないようだ。ただ、語調がよかったので(当時ののは、美しい文語調だった)、新約聖書は何度か読んで、暗記した文章もある。

そのうち、年齢も二十歳に近づき、戦争もきびしくなってきた。いつ召集になるかもしれない。そんな時、河合栄治郎編「学生と読書」という本に、エッケルマンの「ゲエテとの対話」という本が必読書としてあげられているのを知った。岩波文庫のこの本を買って読んでみると、はなはだ親しみやすく、人間とはこういうものであるという感じがする。これで、ゲエテに関心を持ち、「フアウスト」や「ウイルヘルム・マイステル」や「イタリー紀行」を読んだが、「フアウスト」は何回くりかえしてみてもわからなかった。

僕には、むしろ、フが面白く、だから「ゲエテとの対話」が好きなのだ。この本では、いろいろな人がゲエテ家に入りし、それについてのゲエテの感想や生活ぶりがまるで劇でも見るようにうかがわれて楽しかった。後に軍隊に入る時も、岩波文庫で上中下三冊を雑囊に入れて南方まで持っていった。

人に「ゲエテをどう読んだか」などときかれてドギマギすることがよくあるが、簡単にいえば、<sup>⑥</sup>父親がたよりなかったから、代理の父親<sup>⑦</sup>みたいな気持ちで愛読したわけだが、もう一つは、僕は、ゲエテのような生活がしてみたかったのである。

家は四階建てで屋根裏部屋があり、部屋数は多く、美術品がたくさん飾られており、近くには、散歩に適した所があり、ガーデンハウスなどという別荘がある。宮殿で美しい女性に囲まれ、皇太子の頭をなでてみたりする。近所には、シラーという意見の合う友人がおり、家には、ヨーロッパ中の文化人が訪問してくる。時たま、ナポレオンなんかも戸をたたく。こんな生活を僕は空想して楽しんでいった。

ゲエテが関心を持ったり体験したりしたことを、僕もできるだけ真似をしてみようとも思った。

ゲエテは、自然に関心があり、動物や植物の研究をしていたというので、僕も植物学の本を買って読んだし、また、ゲエテは、スピノザを尊敬していたので、僕も古本屋で「エティカ」を買ってきて読んだ。その他にも、「ゲエテとの対話」の中に出てくる詩人や作家のものは、気をつけていて読むようにした。ゲエテがシェイクスピアやモリエールを賞めるので、これも読み、ずっと後には、全集まで買った。

「若きウェルテルの悩み」は、二回か三回読み、住んでいた甲子園口あたりの景色を勝手になぞらえてあてはめ、空想の中でゲエテになって散歩して楽しんでいた。以前は、あのあたりには家も少なく、美しい景色だった。ただ、ゲエテと

ちがつて恋人もいなかったし、あまり女にももてなかったから、女と口をきいたこともなかったのが、少々さびしい。

それでも、空想の散歩は楽しく、近くの別荘を見ると、これはシュタイン夫人の家、甲子園ホテルを見ると、これはワイマール公園大公夫人の家、などと考え、もはや、ワイマールが甲子園だか、甲子園がワイマールだかわからないほどだった。

僕自身も小川を散歩する時は、完全にゲエテで、自分でも、僕なのかゲエテなのか定かでなかった。

僕は、ゲエテがベートーベンと会う話を母に聞かせたが、熱心なのは僕一人で、母はポカンとしていた。おそらく、おかしくなったんじゃないかと思っていたのだろう。

(水木しげる『ねぼけ人生』による)

問一 傍線部①の理由として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 美術学校へ入学できたも同然でエライ絵描きになれると思っていたから
- 2 十分に朝寝坊ができ目がパッチリさめている時に授業を受けられるから
- 3 工業学校の続きということと二年への編入が認められて一年得をしたから
- 4 兵役直前で美術学校に入学できれば軍隊に入らずに済むと思っていたから

問二 傍線部②の内容として、適切でないものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 戦争によって個々の生き方や考え方が左右され影響を受けざるを得ないこと
- 2 戦争によって個々の人生においての選択の自由が奪われてしまうこと
- 3 個人は無力でどうあらがっても戦争という波に飲み込まれていくしかないこと
- 4 戦争下では命の尊厳などは全ての人にとって何の意味も持たなくなること

問三 傍線部③の説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 まとまりがなく、一人一人が別の方を向いている状態
- 2 高揚感に包まれ、皆がむやみに張り切っている状態
- 3 集団意識が高まり、皆が互いを思いやっている状態
- 4 日常から解放され、皆がそれぞれに楽しんでいる状態

問四 空欄 ア (三個所ある)・イ・ウ に入る言葉の組み合わせとして、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 ア 頼もしい  
イ 恐い
- 2 ア 頼もしい  
イ おそれおおい
- 3 ア 勇ましい  
イ 恐い
- 4 ア 勇ましい  
イ おそれおおい
- ウ 悲しい

問五 傍線部④と筆者が述べる理由として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 タマヨケになるなどとはどうしても思えない千人針に皆が駆り立てられているから
- 2 腹だけをまもってもしかたがないのにそれで命が助かるものと皆が思っているから
- 3 タマヨケとして何の役にも立たない千人針を出征兵士が欲しているわけがないから
- 4 天皇陛下のために死ぬのが名誉であるのにタマヨケとして千人針を作っているから



問六 傍線部⑤の理由として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 死と向き合わざるを得なくなったことで生や死という問題が身近なものになったから
- 2 非現実的な思想ばかりがはびこる社会から逃れて現実的な問題を考えなくなったから
- 3 いつ召集されるかもしれない状況になってようやく学生としての本分に気づいたから
- 4 死ぬ前にこれまでは知らずにいた自国の伝統文化に少しでも触れておきたかったから

問七 空欄 7 に入るものとして、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 エッケルマン
- 2 ゲエテ本人
- 3 人間描写
- 4 読書自体

問八 傍線部⑥はどういうことか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 子供の進路や教育には全く興味がないこと
- 2 子供が望む生活を支える経済力がないこと
- 3 人間観や生き方の指標を示してくれないこと
- 4 哲学書の読み方を教えることができないこと

問九 筆者はなぜこれほどまでゲエテに没頭したのか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 戦時下であるなしに関わらず、元来自分が理想としていたものがゲエテの思想や生活であったから
- 2 戦時下で強いられる苦しい生活の中で、精神的な楽しみを唯一与えてくれたのがゲエテだったから
- 3 戦時下でゲエテの思想を会得するには、ゲエテの生活を徹底的に真似ることしか方法がないから
- 4 執着する対象は何でもよく、ただ戦時下だという現実や迫っている死の恐怖から逃れたかったから

## 『近大必勝塾』古文

### 近畿大学の古文について

#### 出題形式

- ・現代文2問と古文1問で60分  
すべてマークシート形式



文章の難易度は高い

古文に不安がある受験生は要注意

#### 出題傾向

- ・物語ではない文章もよく出題される
- ・設問は易しいが主旨を取れないと大変
- ・近世の文章もしばしば出題される
- ・現代文との兼ね合いで時間的に厳しい

## 近畿大学古文の対策

- ・それでも基本的な古文知識の学習を



基本的な古語の習得

文法（助動詞、助詞の意味、判別など）  
文学史は範囲を広く

- ・文章の流れを意識した読解

「解釈にこだわりすぎないこと」

- ・動作の主体が誰なのかを意識して読む

○過去問をやりこむことによって

難易度や時間の感覚を身につける



細部がわからなくても設問に対応できる

ような実力を養成するのが実践的！

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

むかし人はいふべき事あればうちいひて、その余はみだりにものいはず、いふべき事をも、いかにもことば多からで、其 1 たりけり。我父母にてありし人々もかくぞおはしける。父にておはせし人のその年七十五になり給ひし時に、傷寒をうれへて、事きれ給ひなんとするに、医の来りて独參湯をなむすむべしといふ也。よのつねに人にいましめ給ひしは、「年わかき人はいかにもありなむ。よはひかたぶきし身の、いのちの限りある事をもしらず、薬のためにいきぐるしきさまして終りぬるはわるし。あひかまへて心せよ」とのたまひしかば、此事いかにやあらむと。いふ人ありしかど、疾喘の急なるが、見まるるもころぐるしといふほどに、生薑汁にあはせてすゝめしに、それよりいき出で給ひて、つひに其病癒え給ひたりけり。後に母にてありし人の、「いかに、此程は人にそむきふし給ふのみにて、また物のたまふ事もなかりし」ととひ申されしに、「されば、頭のいたむ事殊に甚しく、我いまだ人にくるしげなる色みえし事もなかりしに、日比に。かはれる事もありなむには、しかるべからず。又世の人熱にかかされて、このほのあやまち多かるを見るにも、しかじし事なからむにはと思ひしかば、さてこそありしれ」と答へ給ひき。「これらの事この女の事にも、おもひはかるべし。」かくおはせしかば、あはれ、問ひまゐらせはやと。おもふ事も、いひ出でがたくして、うちすべる程に、うせ給ひしかば、さてやみぬる事のみぞ多かる。」女のこの事の事共は、さてもやあるべき。おやおほぢの御事、詳ならざりし事こそくやしけれど、今はとぶべき人とてもなし。

〔折たく柴の記』による〕

問一 空欄 1 に入るものとして、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 他はいひ
- 2 善悪を知り
- 3 初心を案じ
- 4 義を尽し

問二 傍線部①と同一人物が主語（動作主）であるものを、二重傍線部 a ～ d の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 a
- 2 b
- 3 c
- 4 d

問三 波線部 A と同じ用法の「なむ」として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 うぐひすは植ゑ木の木の間を鳴き渡らなむ
- 2 かの草をもみてつけぬれば、すなはち癒ゆとなむ
- 3 容貌もかぎりなくよく、髪もいみじく長くなりなむ
- 4 わびぬれば身を浮き草の根を絶えて誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ

問四 傍線部②はどのようなことか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 この数日で病状が悪い方向に進んでしまうと、これまでと違った苦しい様子を人に見せるかもしれない
- 2 これまで頭が痛むことはあっても苦しくはなかったが、今回は命が絶えることもあるかもしれない
- 3 これまでの病気では出なかったような高熱でうなされて、ばかげたことを口走ってしまうかもしれない
- 4 これまで薬を服用せずとも病気は癒えていたが、状態が急変して薬を服用することになるかもしれない

問五 傍線部③の説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 何も言わないに越したことはない
- 2 何か言う時には細心の注意を払うべきだ

- 3 言わないのは卑怯だがしかたがない
- 4 言うべき時には伏線を敷かないほうがよい

問六 傍線部④と⑥が指す内容の組み合わせとして、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 ④ 日ごろの父の病状  
⑥ 世間一般のこと
- 2 ④ 日ごろの父の態度  
⑥ 世間一般のこと
- 3 ④ 世間一般のこと  
⑥ 日ごろの父の態度
- 4 ④ 世間一般のこと  
⑥ 日ごろの父の病状

問七 傍線部⑤が指す内容として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 ア いふべき事あればうちいひて、その余はみだりにものいはず
- 2 イ よはひかたぶきし身の、いのちの限りある事をもしらで
- 3 ウ 我いまだ人にくるしげなる色みえし事もなかりし
- 4 エ 世の人熱にをかされて、ことばのあやまち多かる

問八 本文と内容の合致するものはどれか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 昔の人はあまり多く語らないことを美德としており、父親もまたそれに従って寡黙な人であった
- 2 作者の父は口数が少ない人であったため、作者の母は父になぜ話さないのか普段から質問していた

- 3 父親は七十五歳のときに熱病におかされたが、医者がすすめる薬を断って一時は重体に陥っていた
- 4 若い人は病にかかったら効き目のある薬をすぐに飲んだ方がよいが、老人は効きすぎるのでよくない

問九 この文章の作者を次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 鴨長明
- 2 新井白石
- 3 荻生徂徠
- 4 契沖